

1944年7月20日、ドイツ総統

アドルフ・ヒトラーを狙った暗殺計画が実行された。

その名は『ワルキューレ』作戦。

しかしこの計画もまた、実行者たちの

予想に反した結末を迎える。

死せる定めの人を選ぶワルキューレの槍は、

なぜヒトラーではなく実行者たちに向けられたのだろうか。

キューレ作戦

文=白石 光

ドイツ第三帝国とその占領地に君臨する独裁者アドルフ・ヒトラー。何度も繰り返されたヒトラー暗殺の試みの中で、『ワルキューレ』は関係した人物の多さでも最大規模のものだった。

独裁者や独裁政権が出現すれば、あらがう者や抵抗勢力もまた出現するのは、古今東西、世の常である。ナチ党がまだ「有力ながら野党のひとつ」に過ぎなかった一九二三年十一月、戦勝国に対して弱腰のヴァイマル政府に業を煮やした党首アドルフ・ヒトラーは、同様の見地に立っていたドイツ戦

血染めのピア・ホール

……蒼空広がる盛夏の昼下がり。降り注ぐ強い日差しは、まだかろうじて朝露の爽やかさを残す、鬱蒼たる針葉樹の森によって遮られていた。近くの湖面を渡って時折吹いてくる涼風も、暑さしのぎにはうってつけだ。ここは、独ソ戦に向けてオストプロイセン・ラステンブルク郊外に建設された総統大本営（Führerhauptquartier）のひとつ「ヴォルフスシャンツェ」。

心地よい木々のざわめきと小鳥のさえずりに支配された緑濃いこの地に、突然、耳を聳する爆発音が轟いた。時に一九四四年七月二十日、一二四〇時数秒過ぎのことである。しかし、これが「伍長殿」を狙った最初の「硝煙の臭い」というわけではなかった……。

ヒトラー 暗殺計画の 実相

フル

關同盟と連携し、エーリヒ・ルーデンドルフ元陸軍大將らとともにバイエルン州での武装蜂起を計画した。

当時のバイエルン州は独立志向が強く、ヴァイマル政府との対立を度々起こしていた。同月八日の宵、州行政トップのグスタフ・リッター・フォン・カール州総監がミュンヘン市内のビア・ホール『ビュルガーブローイケラー』で有力者や支持者を招いた集会を催し、その席で、同州の独立と君主制の復活をぶち上げると伝えられた。そこでヒトラーは、この機に乗じたヴァイマル政府の打倒を目論んだ。いわゆるミュンヘン一揆である。

集会が始まると、ナチ黨員やドイツ戦闘同盟員が『ビュルガーブローイケラー』を包囲し、カール以下の州指導者

数名を拘束。集まった聴衆に向けて、ヒトラーが国家革命の開始を高らかに宣言した。しかし、ルーデンドルフによつてほどなく解放されたカールらはクーデターの鎮圧を下令する。

翌九日、ヒトラーやルーデンドルフらはミュンヘン中心部のバイエルン防衛軍本部を目指すデモ行進を組織し、二人は約三〇〇〇人の同調者の先頭を歩んだ。ところがオデオン広場で州警官隊の阻止線にぶつかり、警察側の発砲でナチ黨員一六名が死亡。この中には、転んで怪我をしたヒトラーを庇った「アドルフ・ヒトラー衝撃隊」——親衛隊(SS)の原点——の隊員五名も含まれていた。

こうして、国家革命の夢は儚くも潰え去った。逮捕され五年の禁固刑を課

せられたヒトラーはランツベルク要塞刑務所に送られ、この収監中に、かの『わが闘争』の口述筆記が行われた。しかし彼は刑期の満了を待たずして、わずか九か月で釈放されている。

一九三三年一月三十日、遂に自らがドイツ共和国首相に就任しナチ党が政権を掌握すると、以降、ヒトラーは毎年十一月八日の夜に『ビュルガーブローイケラー』で、ミュンヘン一揆で命を落とした一六名の「ナチ党殉教者」の追悼式と演説会を執り行うようになった。一九三九年十一月八日もまた、そんな一日となるはずだった。一九〇〇年時ちよつと過ぎ、ヒトラーが入店する。「ジーク・ハイル! ジーク・ハイル! ……」

一階フロアに配された多数のビア・テールはもとより、吹き抜ける中二階の回廊にまで鈴なりになった二〇〇〇人を超えるナチ黨員、親衛隊や国防軍の将校たちによる声を限りの連呼が、ヒトラー自らの要望で個人行進曲に指

定されていたバーデンヴァイラー・マーチの壮麗なメロディーと重なり、店内は熱狂に包まれた。

ヒトラーは、背景に巨大な党旗が吊り下げられたフロア半ばの演壇へと歩みを進める。ミュンヘン一揆の際に殉教者の血を吸ったといわれる党の聖旗「血染めのスワステイカ」がそれに従う。過ぐる九月一日、既にドイツは第二次大戦に突入しており、ポーランド戦に圧勝したことで、ドイツ国民の多くは「偉大なる総統」に心酔していた。

演説は一九三〇時からラジオで全国に流されたが、ヒトラー一行は早くも二時ちよつと過ぎ、ベルリンへの帰途に就いた。悪天候で専用機が飛べず、代わりに列車を使うことになったからだ。総統が退店すると多くの聴衆も辞去したが、一部の者はセレモニーの興奮醒めやらぬままに歓談と飲食を続けていた。と、二二二〇時、突如大音響と共に店内で時限爆弾が炸裂して建物の一部が崩壊。死亡八名、重軽傷六三名の大惨事となった。負傷者のなかには愛人エヴァ・ブラウンの父親も含まれていたが、ヒトラー自身は紙一重の

差で「死神の大鎌」を免れた。

犯人は、シユヴァーベン出身の家具職人ゲオルグ・エルザーだった。彼は、逃亡すべくスイスへの越境を試みて捕まり、事件の背後関係や共犯者を探るため、ゲシュタポによって徹底的に拷問された。その結果、驚くべきことに、たった一人で周到な計画を練り上げて凶行に及んだことが判明した。

ナチ党上層部の様々な思惑もあり、エルザーは一九四五年まで囚われの身で生かされ続けた。だが、終戦を約一か月後に控えた四月九日発布の極秘指令に基づき、同日深夜に処刑された。そしてその亡骸は、収監先のダハウ強制収容所の死体焼却炉に放り込まれたのだった。

誇り高きドイツ将校団

「内政面では逆らう者を暴力で抑え込み、口では『平和』という題目を唱えつつ、実態は戦争拡大へとまっしぐらそんな輩に母なるドイツを任せてはおけない」

エルザーによる『ビュルガーブローイケラー』爆破事件は、物事の本質を把握し将来を見通せる優れた思考力と、

人並外れた行動力を併せ持った、一個人に負うものだった。だが、ヒトラーとナチ党の台頭が顕著になるにともなって、いくつかの抵抗勢力も誕生しつつあった。なかでも、もつとも有力と目されたのが将校団の有志によるものだ。

将校には高い教養と教育が求められるが、それらを身に付けるには、相應のソサエティーに属していなければならない。ゆえに由緒あるヨーロッパの国々では、古くから将校は経済的、社会的に恵まれた貴族の役目で、彼らは一種のフラタニティーを形成していた。このフラタニティーは所謂「貴族社会」と同義の伝統的なもので、教養、思考、価値観などを同じくする社会的ステータスの高い家系——本人のみならず父も祖父も将校だったという家系も多い——の男子の集合体であった。

戦場における武勲こそが「男子の本懐」であり、祖国（または王室）への忠誠と名誉を何よりも重んじる各国の将校団のなかでも、直近の戦争に敗れたとはいえ、ドイツ将校団は一際誇り高い存在だった。そんな彼らには、皇帝や祖国に代えて、たかだか「庶民階級」出身の税関官吏風情の息子で、軍では伍長（実際には伍長勤務上等兵）

にしかすぎなかった者に忠誠を誓えといわれても、はいそうですかと納得できるものではなかった。

だが、将校団とナチ党は最初から対立していたわけではない。屈辱的なヴェルサイユ体制から脱却して再軍備化を図り、かつてのドイツ帝国の栄光を取り戻そうとするナチ党のメンタリティーは、第一次大戦に敗れた将校団の宿願たる「名誉回復」と軌を一にしていた。だからこそ、前大戦の英雄ルーデンドルフ率いる軍人主体のドイツ戦闘同盟が、ナチ党と肩を伍してミュンヘン一揆を起こしたのである。ヒトラーの「生存圏」拡大のためには武力行使をも辞さないという強硬な考え方に気づき、再び戦争が引き起こされる危険性に目を向けていた「正統派将校」は、当時は先見の明のあるごく少数の者だけだった。

ところが、ヒトラーによって現実には戦争が仕掛けられ、緒戦の連戦連勝から徐々に敗色が濃くなり、さらに親衛隊による残虐なホロコーストの実相が将校団にも広く知られるようになると、ヒトラーとナチ党に反感を持つ「正統派将校」は着実に増加していった。

一方、ナチ党においては「ヒトラー

への忠誠」という、ドイツ将校団とはまったく別の個人崇拜ともいえる新しい価値観のみが重視され、出身階級に影響されない昇進が約束されていた。

政党の立場としては、少数の貴族よりも、国民の大勢を占める庶民の取り込みを重視しなければならなかったからだ。この「庶民を釣り上げる仕掛け」は見事に奏効し、庶民階級の代表たる下級兵士にとっては党員となることはもちろん、党の暴力装置である親衛隊に入営したほうが「出世の機会」——昇進——に恵まれるため、少なくとも戦前から大戦初期まではナチ党の人気は高かった。

にもかかわらず、勃興期のナチ党は政党としてのステータス向上を狙って、ある意味矛盾ともいえる貴族・有識者・聖職者の党員の獲得に殊更とめた。この事実からも、これらの社会階級に属する少数の人々が、当時のドイツ社会にいかに大きな影響力を持っていたかが理解できる。

カナリスの種時き

一九三五年一月、国防軍防諜部の長官に四十七歳のヴィルヘルム・カナリ

反ヒトラー人脈の中核となったカナリス提督（中将）。しかし一九三九年に当時の陸軍参謀総長ハルダーからヒトラー暗殺を打診された際には、これを拒否したといわれている。



ス提督が就任した。身長約一五二センチと小柄だが、知性の輝きを宿した双眸と豊かな白髪が印象的な、軍人臭さを感じさせない紳士である。外観にたがわず、理知的で頭の回転が早いうえ、語学の才に恵まれ音楽や芸術を愛好した彼は、幼少の頃から好奇心も人一倍強く、「覗き魔」なる渾名を付けられたこともあったという。ただし、このようなキャラクターには往々にして見られる繊細で神経質な性格のせいで、シツク・フォビアだったといわれている。カナリスは、ヒトラーとナチ党によるヴェルサイユ条約の破壊と再軍備化は一応評価したが、その他の政策は唾棄していた。リベラルを以てなる彼には、権力に裏打ちされた横暴、理由な

カナリス提督が築いた反ヒトラー派の人脈

Column

以下は、本文中に記した以外の主要な反ヒトラー派の人物。軍人だけでなく法律家や経済人など、ヒトラー政権下で息を殺していた知性と理性の人々である。このカナリス人脈の人々は、そのほとんどが「ワルキューレ」と相前後して逮捕・処刑の憂き目にあっているが、数名は生き延びることができた。人脈の中心人物であるカナリス提督は、「ワルキューレ」実行前に失脚していたが関与を疑われ逮捕。証拠不十分のまま刑務所に収監されていたが、終戦直前に絞首刑に処せられた。（■=自決、●=絞首刑、○=禁固刑、□=生存）

■ ルードヴィッヒ・ベック大将（陸軍参謀総長）
○ フランツ・ハルダー大将（ベックの後任の参謀総長）
● エルウィン・フォン・ウィッツレーベン大将（ベルリン地区司令官）
● エーリヒ・ヘブナー少将（第1軽師団長）
● ウルリヒ・フォン・ハッセル（ティルピッツ海相の娘婿でイタリア駐在大使）
● カール・ゲルデラー博士（元ライプチヒ市長）
● ハンス・フォン・ドーナニー博士（弁護士）
□ ヤルマル・シャハト（ドイツ国立銀行総裁）
□ ハンス・ペルト・ギゼビウス（スイス駐在ドイツ領事館員）
● アルトゥール・ネーベ（刑事警察局長）
● ウォルフ・ハインリヒ・フォン・ヘルドルフ（ベルリン警察長官）
● カール・ボンヘファー教授（ドーナニーの義父の精神医学者）
● ファビアン・フォン・シュラブレンドルフ（法律家）

き野蛮な暴力、道徳観念の欠如、さらには民族存亡の危機さえ招きかねない戦争礼賛といった、彼らのやり方が我慢ならなかったのだ。そこでカナリスはヒトラーの排除を決意したが、情報部の長という役職は、このような陰謀を巡らすにはうってつけのポストだった。最初に彼の同志となったのは、次長のハンス・オスター陸軍大佐だとされている。

で短気なため思ったことは口にしなければ気が済まず、ついでに女性に手が速い。こんな彼は、ヒトラーのことを「エーミール（日本語なら「ぼん太郎」）のような軽蔑感が含まれた渾名」という隠語で呼び、気のおけない将校仲間が集まりでは悪態のつき放題だった。独裁国家を牛耳る独裁者を中傷しても許されたのは、彼が将校だからというだけでなく、ナチ党支配になってからまだ残っていた、かつてのドイツでは当たり前だったリベラルな風潮のおかげでもあった。

以降、知性派の名士たちが次々と同志のネットワークで繋がった。このように、それまでは散在していた「志を同じくする者」を集めて組織化したカナリスこそ、初期の反ヒトラー派最大の功労者といえる。

彼らは、一九三八年のチェコ危機に際してはイギリスに使節を送ってヒトラーの手の内を伝え、イギリスやフランスが宥和政策ではなく強硬政策を示せば、彼の野望を抑え込めると示唆した。また陸軍によるクーデターも計画されたが、ヒトラー側には秘密のまま蜂起を円滑に進めるためのシステムやネットワークを軍内部に構築しない限り、成功は難しいとして実施が控えられた。だが、この件は引き続きオスターを中心に手配と準備を続けることになり、紆余曲折を経て、のちに『ワルキューレ』となって結実する。

そして遂に第二次大戦が勃発すると、カナリスは腹心の同志で弁護士のヨーゼフ・ミュラー博士を介してローマ法王ピオ十二世を動かす和平工作を試みる一方、オスターは、在ベルリンオランダ大使館付き武官ヤーコブス・ザス大佐を通じて、ドイツの西ヨーロッパへの侵攻計画やその時期などを逐次通報した。だが、西方戦に勝利したドイツが返す刀でロシアに侵攻するに至

り、彼らは悟った。

「もはや、軍のクーデターでヒトラーを逮捕し裁判にかけるといいう、悠長な『合法的排除』を試みる猶予はない。唯一、暗殺だけが速やかな排除を可能にするのだ」と。

そうこうしているうちに時は過ぎ、一九四三年二月、ミュンヘン大学を拠点とする反ナチ運動『白バラ』の主宰者で同大学医学部の学生ハンス・シヨルと妹のゾフィ、連座する大学生や教授ら運動家たちが続々と逮捕された。そして、悪名高き民族法廷長官ローラント・フライスラーの手で次々に死刑が宣告され、短期間で約一〇〇人がギロチン台の露と消えた。

この事件は、同じ時期に起きたスタ



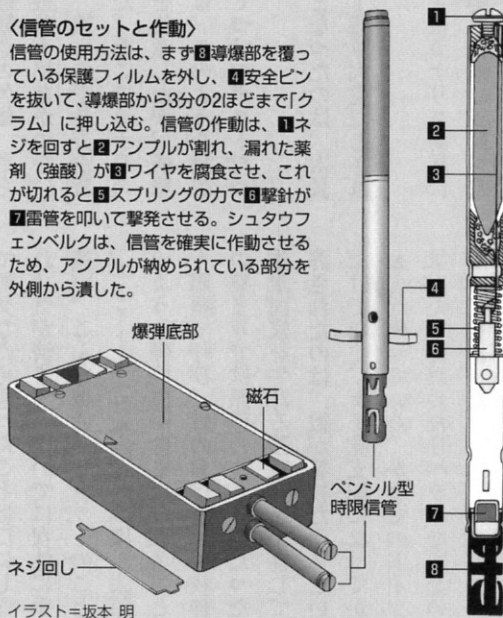
ヒトラー暗殺に積極的に関与したトレスコウ少将。プロイセン軍人の名門一族出身。第一次大戦に従軍した際、その俊英ぶりを見た上官が「将来は陸軍参謀総長が謀反人」と評したという。

「クラム」とペンシル型時限信管の構造

「クラム」は、長辺15センチ、短辺6センチ、高さ約3センチのケース内にプラスチック爆弾を充填する小型爆弾である。起爆にはペンシル型時限信管を1本または確実に起爆させるため2本用いる。この信管は、点火時間別に最短10分から最長14時間30分までの6種類があった。

〈信管のセットと作動〉

信管の使用方法是、まず③導爆部を覆っている保護フィルムを外し、④安全ピンを抜いて、導爆部から3分の2ほどまで「クラム」に押し込む。信管の作動は、①ネジを回すと②アンブルが割れ、漏れた薬剤（強酸）が③ワイヤを腐食させ、これが切れると⑤スプリングの力で⑥撃針が⑦雷管を叩いて撃発させる。シュタウフェンベルクは、信管を確実に作動させるため、アンブルが納められている部分を外側から潰した。



イラスト=坂本 明

ミス・ファイア

リングレードにおける第6軍の降伏——「偉大なる伍長殿」の戦争指導によって生じたドイツ軍将兵三三万名の悲劇——と重なり、カナリスら反ヒトラー派を焦らせた。さらに、スターリングレード戦の大損害をはじめ「ヒトラーの戦争」の実相を嫌というほど見せつけられた佐官、尉官級の下級将校の「反ヒトラーの同志」が急増。様々な事情から中立の立場をとる将校のなかにも、暗殺とそれに続く政権掌握が円滑に運ばば、反ヒトラーへと靡く者が多数潜在するようになった。

一九四三年三月十三日、ヒトラーはヴィニツァの総統大本営「ヴェーアヴォルフ」からの帰路、スモレンスクの中央軍集団司令部に立ち寄り、同軍集団司令官ハンス・フォン・クルーゲ元帥と会見することになった。実は同軍集団の作戦参謀ヘニング・フォン・トレスコウ少将は以前から反ヒトラー派で、その副官であるシュラブレンドルフ中尉も同志の一人だった。チャン

ス到来である。

確実に殺すという観点から、当初はゲオルク・フォン・ベーゼラーガー大佐率いる将校数名で編成された襲撃班が、昼食中のヒトラーを取り囲んで射殺するという方法が考えられた。しかし、かねてからトレスコウに反ヒトラー派に与するよう説得されていたにもかかわらず態度が煮え切らないままのかかわらず態度が煮え切らないままのクルーゲが、同席する自分にも危害が及ぶのを恐れてこれを拒否。代案として、飛行中のヒトラー専用機を時限爆弾で爆破することになった。

時限爆弾の調達には、国防軍防諜部から中央軍集団司令部に派遣されていた情報将校ルドルフ・クリストフ・フォン・ゲルスドルフ大佐に託された。彼は、防諜部破壊工作課の課長ヴィルヘルム・ホツツェル中佐に頼み込んで、鹵獲したイギリス軍特殊部隊隊員の「クラム（内部にプラスチック爆薬を充填して使用する二個一組の吸着用磁石付き合成樹脂製弾殻）」と充填用のプラスチック爆薬、それに「クラム」の標準使用信管のペンシル型時限信管を入手した。イギリス製プラスチック爆薬が調達されたのは、ドイツ製爆薬より強力なことが反ヒトラー派の実験で確認

*ヒトラー専用機爆破計画は「ブリッツ（電光）」作戦と命名された。
*クラム＝二枚貝の意。本爆弾が2個1組であったことから付与された秘匿名。

されていただけでなく、あわよくばイギリス軍の犯行に偽装できれば、との思惑もあったからだ。

またベンシル型時限信管とは、その名のごとく金属製の鉛筆状で、一方に強酸が仕込まれており、反対側には雷管が収められ、両者の中間に細いワイヤで固定された撃針があった。そして、酸が仕込まれた部分を潰すと、撃針部に流入した酸がワイヤを徐々に腐食し、一定時間後にワイヤが切れて撃針が解放され雷管を突き、起爆するという構造だった。

気温の違いで酸の腐食力が変化するため、起爆時刻の正確さは時計式時限信管に劣ったが、大なり小なり機械音を発する他の時限信管に比べてまったく無音という点が図抜けた長所であり、これが理由となって今回の使用が決まった。このベンシル型時限信管には、ワイヤの太さの違いによって、最短一〇分から最長一四時間三〇分までの起爆時間が異なる六種類が存在した。

トレスコウとシユラブレンドルフは、三〇分遅延のベンシル型時限信管を振じ込んだ四角い形状の「クラム」二個を、同様に四角いコアントロー（リキユール）の瓶が二本収まった小包に見

えるよう偽装した。十三日当日、ヒトラーとの昼食の席でトレスコウは、たまたま隣り合わせに座った陸軍総司令官部作戦課のハインツ・ブランド中佐がヒトラー専用機に同乗することを知るところ話しかけた。

「実はお願いがあるのだが。陸軍総司令部総務局長のシュテュープ少将と賭けをしたのだが、私が負けてしまった。そこで、酒瓶を二本ばかり彼に届けてもらえんかな」

ブランドはこの要請を快諾し、ヒトラー専用機のプロテクトルFw 200「インメルマンⅢ」号に乗り込む直前、シユラブレンドルフから小包を受け取った。

しかし「クラム」は爆発しなかった。トレスコウは、自分が危うく爆殺されかけたことなど露知らないブランドに慌てて電話をかけ、品物を間違えたので急ぎ副官を取りに行かせる旨を伝えた。翌日、ラストエンブルクに飛んだシユラブレンドルフが小包を引き取り、分解して調べたところ、信管は正常に作動したにもかかわらず起爆には至らなかったと判明。ヒトラーは、またしても命拾いした。

だが、反ヒトラー派はめげなかった。

次の刺客は「クラム」を調達したゲルスドルフ本人である。当時、彼は愛妻を亡くしたばかりで自暴自棄気味になっており、シユラブレンドルフが回収した「クラム」に今度は一〇分遅延の信管を装着し、三月二十一日にベルリンのツォイクハウスで開催される鹵獲兵器展示会に来たヒトラーに寄り添って自爆することになった。ところが当日、ヒトラーはひどく急いでおり、結局、爆弾が爆発する前に会場を去ったため、ゲルスドルフは大慌てでトイレに飛び込み、作動寸前の信管を水に流して事なきを得たのだった。

じまいとなった。

隻腕隻眼の勇士

ヒトラー側も、反ヒトラー派の暗躍を見過ごすはずがなかった。ゲシュタポは、得意の泳がせ捜査や潜入捜査によって証拠固めを重ねていた。そして四月五日、遂に国防軍防諜部に捜査の手が入り、カナリスの同志の一人であ

る弁護士ドーナニーが逮捕され、カナリスとオスターも事実上失脚した。だが、反ヒトラー派にはまだ有力な指導者が残っていた。軍務部長フリードリヒ・オルブリヒト大將である。三月二日にシユラブレンドルフが彼を訪ねて、もし十三日の暗殺が成功した暁にはいち早く国内軍を蜂起させてヒトラー側の動きを封じてくれるよう依頼していた。そのとき、オルブリヒトはこう答えている。

「覚悟のうえだ、いつ始めてもよいぞ。九月十五日、彼は反ヒトラー派のコンネによって、隻腕隻眼の一大佐を自分の参謀長に迎えた。『運命の男』クラウス・シエンク・フォン・シュタウフェンベルクである。



オルブリヒト大將は第一次大戦に従軍し、終戦後も陸軍に残って軍一筋に歩んだ生粋の陸軍軍人であった。暗殺成功後は国内軍を動員して治安維持にあたる予定だった。

ヴュルテンベルク公ヴィルヘルム二世の侍従長を務めるシユヴァーベン貴族の父親の許、双子の兄弟に次ぐ三人目の息子として一九〇七年十一月十五日に生まれたクラウスは、頭脳明晰ながらやや病弱だったが、大学入学資格取得後、陸軍に入営し将校に任官した。そして難関のベルリン軍事大学参謀本部課程に進み、将来を約束されたエリート・コースを歩み始めた。理知的で裏表がなく率直な人柄で、接点を持った人々皆に好かれた彼は、戦前から第二次大戦初期まではヒトラーに共感していたが、戦争の泥沼化とホロコーストの実態を知るにつけ、公然とヒトラーの排除を唱えるようになる。

一九四三年二月十四日、シユタウフ



シユタウフエンベルク大佐は名門貴族の血筋で、プロイセン参謀本部創始者の一人であるグナイゼナウの曾孫にあたる。伯爵（グラーフ）の爵位を持ち、敬虔なカトリック教徒であった。

エンベルクはチュニジアで戦っている第10戦車師団の首席参謀に就任したが、四月七日に戦闘爆撃機の機銃掃射を受けて右手首から先と左手の薬指と小指それに左目を失う瀕死の重傷を負い本国に送還された。彼は傷痍軍人として退役するのを潔しとせず、リハビリに努め、何とか回復したところでオルブリヒトの求めに応じたのである。

着任前の八月、シユタウフエンベルクはトレスコウと会った際に、もし三月の暗殺の試みが成功していたとしても、ヒトラー側の動きを封じる策が不十分だったため、クーデターは失敗しただろうという話を聞いていた。そこで彼は着任後、オルブリヒトとも相談し、ドイツ本土が奇襲攻撃を受けたり国内にいる膨大な人数の外国人労働者らが反乱を起こした際の緊急対処計画の活用を考えた。この計画は「ワルキユーレ」と呼ばれており、既に一九四二年の春に策定されていたが、これを逆手に取り、悟られぬよう修正を加えて、ヒトラー暗殺直後の国内平定に利用しようと考えたのである。そして、トレスコウらと共に「その時」のための声明や命令文の起草に没頭した。曰く「本日、総統が死去された。こ

の混乱に乗じて権力奪取を企てる動きがあるため、国内軍はその鎮圧と平定に向けて……」。

一九四四年五月、好機が到来する。

シユタウフエンベルクが国内軍総司令官フリードリヒ・フロム上級大将の参謀長に任命されたのだ。もともと、この人事の裏には反ヒトラー派の画策もあったようだ。国内軍参謀長なら「ワルキユーレ」の修正と発動に関する権限を有し、しかもヒトラーに直接報告を行う機会も少なくない。そこで彼は、自ら刺客となることを考え始めた。なぜなら、同志の間に横たわる「温度差」を感じていたからだった。

問題は、今やオルブリヒトと共にクーデターの中枢にいる自分が、ヒトラー暗殺直後のもっとも大事な時期にベントラー街（OKH国内軍司令部がある）を留守にしていなければならないことと、上司のフロムのことであつた。前者に関しては、ベルリン軍事大学時代からの親友で、シユタウフエンベルクが絶大な信頼を寄せていた参謀本部勤務のリッター・アルブレヒト・フォン・クヴィルンハイム大佐に任せることで解決したが、オポチュニストのフロムの動きは予測できなかった。



暗殺加担を明確にしなかったフロム上級大将。一九〇六年に軍に入り、以後人生のほとんどを軍人畑一筋に歩んだ。結果的に反ヒトラー・親ヒトラー双方にとつて裏切り者となつた。

七月六日、シユタウフエンベルクは、件の「クラム」を携えて「ベルクホーフ」に赴いた。彼は、一時は刺客になる覚悟で「クラム」を保管していたこともある同志のシュテューフ少将に直接会つて決意のほどを聞いたが、シュテューフはすでに「冷めて」おり、これでシユタウフエンベルクは腹を括つた。

十一日、彼は再び「ベルクホーフ」に行った。今回は「クラム」に三〇分遅延のベンシル型限信管が据え込んであったが、暗殺後のクーデターの最大の障害となる親衛隊長官ハインリヒ・ヒムラーと、ヒトラーの後継者に指名されている国家元帥ヘルマン・ゲーリングがおらず、実施は見送られた。

十五日、シュタウフェンベルクは『ヴォルフスシャンツェ』に移動したヒトラーの許に赴いたが、やはりヒムラーとゲーリングが不在で暗殺は中止された。「現場」のシュタウフェンベルクは決行を望んだが、十一日と同様に「後方」のオルブリヒトらが反対したのだ。だが、誠実なクヴィルンハイムは早々と『フルキューレ』を発動してしまっていた。

この後始末として、オルブリヒトは『フルキューレ』の演習は大成成功だったと誤魔化し、出動した部隊の矛先を収めるのに奔走したが、本来ならフロムかシュタウフェンベルクだけに発動権がある『フルキューレ』に関わったことで、オルブリヒトはフロムから厳しく叱責された。

その日

運命の七月二十日がやって来た。○八〇〇時頃、シュタウフェンベルクは同志の副官ヴェルナー・フォン・ヘフテン中尉と共にラングズドルフ飛行場をユンカーズJr.52特別便で飛び発ち、一一〇〇時前『ヴォルフスシャンツェ』に到着した。

この日は暑かったため、コンクリート補強が施された木造バラックで会議が行われることになった。シュタウフェンベルクは控室で「クラム」に一〇分遅延のペンシル型限信管を据え込んで起動させたが、ここでミスをした。本来なら、二個で一組の「クラム」のうちの一個だけを書類鞆に入れ、なぜか一個はヘフテンの手許に残してしまつたのだ。その理由は、当事者二人が他界しているため永久に藪の中である一二三〇時ちょっと過ぎ、シュタウフェンベルクは会議室に入った。陸軍参謀本部作戦課長アドルフ・ホイジンガー中將を挟んでヒトラーの右側に立つた彼は、作戦テーブルの下に「クラム」入り書類鞆をできるだけヒトラーに近づけて置く。そして、しばらくすると急用の電話を理由に退出した。

屋外に出たシュタウフェンベルクが、脱出用の車を確保したヘフテンと落ち合つてすぐに爆発音が轟いた。本稿冒頭のシーンである。

ここからは、同志の総司令部通信部長フリッツ・エーリヒ・フェルギーベ大將の仕事だった。反ヒトラー派がクーデターを進めやすいように『ヴォルフスシャンツェ』と外界の通信を遮

断するのだ。だが実際には、バックアップの通信回線や直通回線が存在しており、完全な通信遮断は不可能であつた。

一方、シュタウフェンベルクはヒトラーの生死を直接に確認できないまま大慌てで現場を離れなければならないかつた。もしゲートが封鎖されて足止め

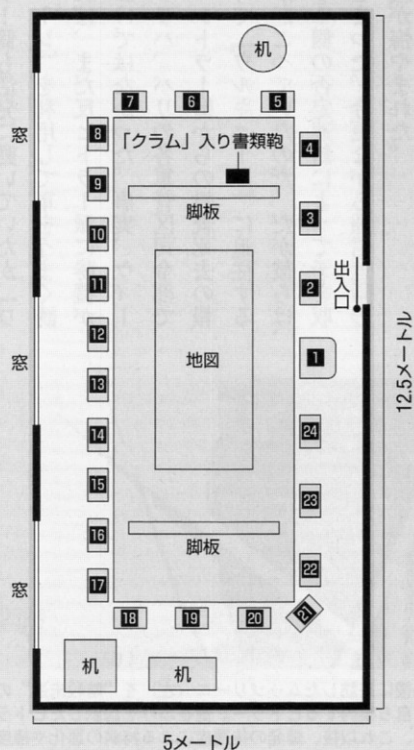
『ヴォルフスシャンツェ』会議室の席次と死傷者

Column

図は会議室の座席配置と「クラム」入り書類鞆の位置。作戦テーブルには厚い脚板があり、書類鞆はヒトラー①から見て脚板の向こうに位置していたため、ヒトラーは爆発の直接的な影響を受けなかった。③から⑨に位置した人物の多くが重傷、または死亡していることを考えれば、鞆の位置が暗殺の成否を分けてしまったともいえる。

〈当日の席次〉 ○＝軽傷、●＝重傷、●＝死亡（重傷のち死亡を含む）、無印＝大きな外傷なし

①アドルフ・ヒトラー ○、②ホイジンガー中將（陸軍参謀本部作戦課長）、③ホルテン飛行兵大將（空軍参謀総長）●、④プラント参謀本部大佐（参謀本部主席將校）●、⑤ボーデンシャッツ飛行兵大將（空軍総司令部の総統本営連絡將校）○、⑥シュムント中將（国防軍軍頭総統副官・国防軍人事局長）●、⑦ボルクマン参謀本部中佐（総統副官）○、⑧フォン・ブットカーマー海軍少將（海軍総統副官）○、⑨ベルガー（速記者）●、⑩アスマン海軍大佐（国防軍統帥部海軍本部將校）、⑪シェルフ少將（国防軍最高司令部、軍事史編纂総統特別委員）○、⑫プーレ大將（国防軍最高司令部陸軍本部長）○、⑬フォス海軍少將（海軍総司令官代理）、⑭フェーゲラインSS中將（武装SS総代）、⑮フォン・ペーロウ空軍大佐（空軍総統副官）、⑯ギュンシェSS大尉（総統副官）、⑰ハーゲン（速記者）、⑱フォン・ヨーン（カイトル元帥副官）、⑲ビュックス少佐（ヨードル上級大將副官）、⑳ヴァイツェンエッガー中佐（カイトル元帥副官）、㉑フォン・ゾンライトナー参事官（外務省総代）、㉒ヴァーリモント大將（国防軍統帥部長官代理）、㉓ヨードル上級大將（国防軍統帥部長官）○、㉔カイトル元帥（国防軍最高司令官）



を食らった、ベントラー街に戻って蜂起を指揮できなくなってしまうからだ。

あまりに慌てたため、彼は軍帽と革帯を忘れたが、この期に及んではどうでもいいことだった。『ヴォルフスシャントゥエ』に入りするための二箇所のゲートが封鎖される直前、辛うじてすり抜けたシュタウフェンベルクの乗車は、真つ直ぐにヴィルヘルムスドルフの緊急用飛行場を目指した。途中、ヘフテンは未使用の「クラム」と工具類を森の中に投げ込んだが、運転手のエーリヒ・クロイツ少尉がそれをバック・ミラー越しに見ており、後の捜索で発見されている。

シュタウフェンベルクらが、同志の陸軍主計総監エドゥアルト・フォン・ヴァーグナー大將が手配したハインケルHeinrichでベルリンへの帰路を急いでいた頃、フェルギーベルからの第一報がベントラー街にもたらされた。

「ヒトラーは生きている！」

現場が木造バラックのため爆風が外に逃げてしまったこと、「クラム」が一個しか使われなかったこと、頑丈なチーク材の作戦テールが爆風除けになったこと、会議に出席していたブラン

トが爆発直前に書類鞆の位置をずらしたことなどが重なり、ヒトラーはごく軽傷で済んだのだ。

凶報を伝えた電話口で、彼はクーデターの続行を求めた。混乱が続いているうちに『ワルキューレ』を発動すれば、ヒトラーが生きていても、勢いで軍の蜂起を成功に導ける可能性があると思えたからだ。だが、この衝撃的な報告にオルブリヒトらは躊躇した。ベントラー街の結論は「とりあえずシュタウフェンベルクを待とう」であった。

やがて暗殺失敗を知らずにラングスドルフ飛行場に着いたヘフテンが電話でヒトラーの死を伝えると、彼らはこれを信じてやっと動き出す気になった。

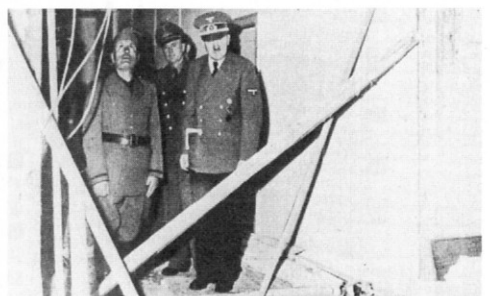
ところがこの日、フロムはベントラー街におり、電話で總統側近の国防軍最高司令部長官ヴィルヘルム・カイテル元帥と話し、ヒトラーの生存を知って『ワルキューレ』の発動命令書への署名を拒否。そこで権限外のオルブリヒトが署名して一六〇〇時少し前にやっと発動されたが、立ち上がりの貴重な三時間が無駄に失われた。

一六三〇時頃、シュタウフェンベルクとヘフテンがベントラー街に戻った。貴重な時間は時々刻々と失われており、

ヒトラー側も活発に動いていたが、『ワルキューレ』を利用して軍をうまく誘導すれば、まだ反ヒトラー派に勝機がないわけではなかった。事実、ウィーン、プラハ、パリの各軍管区司令部では、ベントラー街からの總統死去の報を受けて『ワルキューレ』に従従する動きが起こっていたのだ。だが彼らは、ヒトラー側の否定連絡によって矛を収めてしまった。今更ながら通信遮断の不徹底が悔やまれた。

ベルリンでは、ゲーリング通りのヨゼフ・ゲッベルス宣伝相の私邸がヒトラー側の反撃拠点となっていた。筋金入りのナチ黨員だった「グロースドイッチュラント」保安大隊長エルンスト・レーマー少佐は、反ヒトラー派のベルリン駐留部隊司令官パウエル・フォン・ハーゼ中將から官庁街の封鎖を命じられた。当初、彼は命令通りにしたが、疑問を感じて二〇〇〇時前に独断でゲッベルスに会い、そこでヒトラーとも電話で話し、実情を把握すると反ヒトラー派の制圧に動き出した。

二二〇〇時過ぎ、ベントラー街でも、反ヒトラー派の不利を見切ったフロムらが手勢を集めて彼らの逮捕に着手し、小規模な撃ち合いの末、シュタウフェ



当日午後に来訪したムッソリーニ（左）を「暗殺未遂」の現場に自ら案内するヒトラー。健在ぶりを誇示したヒトラーだが、これ以後、爆発の後遺症による持病の悪化や極度の人間不信といった事件の余波に苛まれることになる。

ンベルクは左腕に被弾。オルブリヒトらとともに捕らえられてしまった。もはやこれまでである。

クーデター成功の暁には新しい国家元首に就任することになっていた元陸軍参謀総長ベック大將は、ベントラー街に来ていた。彼は拳銃で自らを処することを認められたが死に切れず、別室でフロムの手勢の一人が首筋を撃ち抜いて引導を渡した。

「總統の名において、小官は即決裁判の判決を下す。オルブリヒト大將、クヴィルンハイム大佐、シュタウフェンベルク大佐、ヘフテン中尉の四名を死刑に処す。なお、処刑は即時実施する」

『フルキューレ』作戦計画の概略

Column

反ヒトラー派は、クーデターの概略を次のように組み立てていた。まずヒトラーを暗殺し、このとき同時に、ゲーリングとヒムラーも暗殺できれば最良とする。本文中にも記したように、ゲーリングはヒトラーが直々に指名した有要における後継者、つまりナチ党のナンバー2であり、ヒムラーの方は、親衛隊というナチ党の武力装置の頂点に立つ人物だからだ。こうして「ヒドラの頭」三つを切り落とすと同時に「フルキューレ」を発動。各種の国内警備部隊、予備役や負傷回復期の将兵、編成途中の

部隊や各種の軍学校から成る国内軍を動員して、ナチ党および親衛隊関連機関、ゲシュタポ、電話局、中央官庁、行政機関、ラジオ放送局を一斉に占拠。ヒトラー側の反撃を抑え込むとともに、ラジオを通じて、暫定政府が樹立されたことを新国家元首のベックが第三帝国領全土に公布。前線部隊には国内軍司令部からその旨を傳達する。そして可及的速やかに国防軍による国内の平定を行いつつ、可能な限り有利な条件で連合国との講和を結ぶという予定だった。

(文=白石光)

フロムの宣告のあと、四人は屋外に連れ出された。その頃には「グロースドイツチュラント」大隊の分遣隊が到着しており、サーチライトで咄々と照らされたベントラー街の中庭には、銃殺用の土盛りが設えられていた。

〇〇三〇時少し前、銃殺隊はまずオルブリヒトを射殺。次にシユタウフェンベルクが土盛りの前に立たされたが、銃殺隊が発砲する寸前、ヘフテンが彼に覆い被さって弾丸よけとなり、先に

死んだ。続いて撃たれる直前、シユタウフェンベルクは叫んだ。

「神聖なるドイツよ、不滅なれ！」

最後にクヴィルンハイムが撃たれて、処刑は終わった。

フロムは、この事件にかなり関与していたが、彼自身が事件にかかわっていたことを立証する直接の証人たちを抹殺できたので、ヒトラーへの面目も立ち、わが身は安泰とばかりに胸を撫で下ろした。しかし結局は逮捕され、

自分も銃殺に処せられたのだった。

吹き荒れる報復の嵐

かくして、反ヒトラー派の蜂起

「七月二十日」事件は失

敗に終わった。ヒトラーの稚拙な戦争指導で失われるドイツ軍将兵と、ホロコーストで失われる無辜の人々の数多の生命を救うとともに、連合国との講和の途を模索しようとした「誇り高きドイツ将校団」の思いは、泡沫の夢として潰

え去ったのである。

怒り狂ったヒトラーは、反ヒトラー派の根絶を命じた。そのため、わずかでも嫌疑をかけられた者は

全員逮捕され、件の民族法廷で裁かれた。一般的な法の精神とは逆の「疑わしきは罰す」の考え方に基づいて裁判は進められ、特に主要人物の審理に際しては、裁判長のフライスラーが、ヒトラーの要望通りに被告人を徹底的に罵倒して辱めた。もともと、この「狂気の裁判官」は一九四五年二月三日のシュラブレンドルフの裁判中、連合軍の爆撃を受けて死んだ。

復讐裁判の常で死刑が異常に多く宣告され、処刑においても、できる限り苦しませてから死に至らしめるべく、特別に考案された残酷な絞首刑が用いられた。ヒトラーのたつての希望で、主要人物の処刑の様子は仔細漏さず動画に記録され、受刑者が四肢を激しくばたかせて断末魔の「死のダンス」を踊る様子を、彼は楽しみに繰り返し鑑賞したという。なお、関係者の処刑は実に敗戦直前まで続いた。

「七月二十日」事件関連の逮捕者は約一五〇〇名、刑場の露と消えた者は約二〇〇名だったが、冤罪にもかかわらず処罰された者も少なくなかった。二度と同様の事件が起こらぬよう「鼻持ちならない貴族(将校団)」の背骨を叩き折って再起不能とし、ナチ党による

支配体制をよりいっそう強固にするためである。このような流れのなかで、国民的英雄エルヴィン・ロンメル元帥や、優柔不断ながらも理論的なクルーゲ元帥は自殺を強いられた。

本稿で紹介した事例も含めて、その存命中にヒトラーを狙った暗殺計画は実に四十数件にも及んだという。もちろん未遂に終わったものが多いが、一九四五年四月三十日に廃墟と化したベルリンで自決して果てるまで彼が生きた長えなことができたのは、やはり幸運だったからに他ならない。

ヒトラー自身、将校団や有識者らが「邪魔な存在」なことには最初から気付いていたが、ドイツ社会に絶大な影響力を持つ彼らを排除すれば、自らと党が国民全体の信頼を失う可能性があることは理解していた。そこでやむを得ず共存の途を選んだが、彼らが「出来の悪いクーデター」を仕組んだおかげで、棚ボタ式に「彼ら自身が進んで自らの首を差し出す機会」を得る結果となった。そして、この事件で有能な人々が多数処刑されたことは、戦中の戦争指導はもちろん、戦後に至るまで、ドイツ社会全体にとっての大きな損失となったのである。

7月20日、ポニーキャニオンより映画『フルキューレ』のソフト(DVDとブルーレイ)が発売。これを記念して読者にDVDをプレゼントします。詳しくは132ページの新着情報をご覧ください。